教育家庭新聞

2020年（令和2年）

6月15日

月曜日

第2171号

水無月・風待月・季夏

夏至（6/21）
半夏生（7/1）
小暑・七夕（7/7）

第3月曜日発行

教育家庭新聞社
発行所＝〒111-0053東京都台東区浅草橋3-1-8
TEL：03（3864）8241㈹
FAX：03（3864）8245
郵便振替口座　1309−53693
購読申込み　☎03（3864）8241 Eメール kks@kknews.co.jp
ホームページ　https://www.kknews.co.jp/
創刊 昭和36年7月 ©教育家庭新聞社　1部 480円

紙面案内

熱中症対策特集……2・3面
例年並み以上の高温が予測される今夏、感染症でマスク使用が必須となるなど、例年以上に熱中症対策が重要。スポーツ中の事故対応等の課題と、熱中症対策に導入したい備品の紹介をまとめた。

学校保健……4面
学校再開後の養護教諭には、今後の学校を通じて感染の再拡大を防止するという最大の役割がある。埼玉大学・戸部秀之教授は、校内では他の教職員と、校外では保護者や関係機関と、連携しての取組がポイントだと指摘する。

教育旅行特集……5面
修学旅行の中止、延期等の判断を求められる学校や教委。もし中止だとしても代替プログラム実施が望ましい。関係機関から実施推進の意見を聞くと共に、各地の教育旅行情報やオンラインで体験できる博物館情報をまとめた。

食育・学校給食……6面
本格的な学校給食再開には、多くの学校がまだ先のこと。「おうちごはん」を延長して、楽しみながら家庭でできる"食育ゲーム"を、弊紙連載コーナー筆者・大留光子先生からアイデア提供してもらった。

学校図書館……8面
翻訳ミステリーの老舗から新レーベル「ハヤカワ・ジュニア・ミステリ」が創刊。児童向けながら完訳にこだわり、読み易く工夫を加え、作品本来の魅力を伝える編集方針だという。

連載
教職員のメンタルヘルス　第67回…1面
学校給食は食育の教材　第60回…6面
学校図書館なるほどQ＆A　第58回…8面

■Twitter
@kyoikukatei

■KKS Webはこちら→

情報収集等に専門性を

埼玉大学・戸部教授に聞く
学校教育再開と養護教諭の役割

学校再開後の教育現場で健康管理の先頭に立つ養護教諭には、その専門性を発揮して情報収集や校内外との連携構築を担うなどの期待が大きい。学校の長期休業中の児童生徒の健康課題について、全国の養護教諭を対象にアンケート調査（3月末集計）を行った埼玉大学・戸部秀之教授（学校保健学）に本紙は、同調査結果を踏まえ学校再開後の養護教諭の役割・留意点等を聞いた。【詳細は4面に続く】

重要な保護者との連携

学校再開後の養護教諭への期待として戸部教授は、養護教諭の専門性を発揮して、①新型コロナウイルス感染症の最新情報収集、②専門機関とのネットワーク作り、③よりよい校内体制やシステムづくり等をあげた。

再開後の注意点には第一に保護者の理解・協力を求めることをあげた。日々の検温・健康観察をしっかり行うことで、家庭と学校間の感染の連鎖を未然に防ぐため。またもし児童生徒が発症した場合に、養護教諭は最も濃厚接触の可能性が高い立場であり、しかも一人職で代替ができないことから、十分な感性予防を施すことを学校管理・設置者にも求めた。

さらに情報収集の方法に触れて、信頼できるインターネット上からの収集に加え「SNSなどで養護教諭同士が相談、情報交換」して、「横のネットワークを広げて悩みやアイデアを出し合い」、その成果を多くが共有することを推奨した。

3月に行った調査はWeb上で協賛した養護教諭1311人が対象。休業中の児童生徒について心配される健康・安全面で、感染や感染予防関係以外では、「ゲームやインターネットなどの過剰使用の影響（依存、昼夜逆転など）」が最も多く、中学校で88%、小学校は84%が「強い心配・懸念」を抱いていた。

次いで睡眠・食・歯磨き習慣の低下といった「生活習慣の悪化」（小77%、中79%）、「運動不足の影響（肥満、体力低下、発育発達）」の心配（小70%、中70%）などの結果だった。

体育授業、マスク外して間隔とる

スポーツ庁通知
熱中症に配慮して屋外で

学校の新型コロナウイルス感染症対策としてマスク着用や「三密」の回避が実行される一方、体育の授業ではマスク着用による呼吸困難や熱中症のリスクが大きいため「マスク着用は必要ない」とする事務連絡が5月21日、スポーツ庁から通知された。同時に、地域の感染状況を踏まえ、児童生徒間に十分な間隔をとる等の配慮も求めた。

事務連絡では体育授業の実際に則し、細部にわたって注意喚起。周知を求めている。

■2m以上間隔の確保＝児童生徒間を2m以上確保。ランニング等で同方向に動く際はさらに距離をあけ、教え合う場合は2m以上あけ不要な会話・発声を行わない。

■着用希望の場合は否定しない＝児童生徒が希望する場合、医療・産業用ではなく家庭用マスク着用を指導。その際は激しい運動を控える、呼吸が苦しい様子ならマスクを外し2m以上間隔をあけて休憩させる。

■体育授業は可能な限り屋外で実施＝屋内で実施する場合は呼気が激しくなる運動を避け、こまめな換気・消毒等の防護措置をとる。

■体調不良の場合は体育授業を見学させる＝見学の際はマスク着用し2m以上空け、高温なら熱中症にならないよう日陰で必要に応じてマスクを外し児童生徒同士の距離を確保する。

■教師は原則として着用＝ただし自ら身体へのリスクがある、指導のため自ら運動する場合は外してよい。不要な会話や発声を行わず、2m以上の距離を確保する。

■密集・接触が多い運動は避ける＝地域の感染状況を踏まえ安全な実施が困難な場合、当面実施せず、年間指導計画の中で順序を入れ替える等の工夫をする。

＜体育における感染症対策＞

児童生徒間の距離を2m以上確保するとともに、不必要な会話や発声を行わない、体育の授業の前後に手洗いをするよう指導する
軽度な運動や児童生徒が希望する場合はマスクの着用を否定しないが、家庭用マスクを着用するよう指導する
体育の授業は可能な限り屋外で実施する。屋内で実施する場合はこまめな換気や消毒液の使用などを実施する
児童生徒の健康状態を把握し、体調が優れない児童生徒の体育の授業への参加は見合わせること
教員は、原則として体育の授業中もマスクを着用。マスクを外す際は、児童生徒との距離を2m以上を確保すること
児童生徒が密集する運動、近距離で組み合ったり接触したりする場面が多い運動は当面実施しない

「新しい生活様式」
PTA通じて家庭にも要請
文科省

学校の再開にあたり文部科学省は6月1日、（公社）日本PTA全国協議会、（一社）全国高等学校PTA連合会等の各PTA団体を通じ、「三密」回避や咳エチケット、手洗いうがい励行などの学校が取組む「新しい生活様式」への家庭の理解・協力を求めた。

感染は多くが学校内より家庭からの拡大であると言われることから、「仲の良い友人同士の家庭間の行き来や、家族ぐるみの交流を通じて感染が拡大」するリスク等を述べ、会食には対面を避ける等に配慮、学校外での感染拡大を防ぐ理解を求めた。

感染症予防に歯みがき

日本学校歯科医会が奨励

感染症予防にはうがい・手洗いに加え、歯みがきによる口腔ケアが大切だとする日本学校歯科医会は6月1日、「リスクを低減しつつ給食後の歯みがきは大変意義あること」とし、チェックリスト（下の表）を公表した。

混雑を避け、換気に配慮する等に加え、飛沫の飛び散り防止のため、うがいは少量の水で低い位置から吐き出す等、具体的な行動の内容だ。

歯みがき実施のためのチェックリスト
（日本学校歯科医会作成）

■ソーシャルディスタンスについて配慮工夫がされている
＊児童・生徒間に必要な間隔がある
＊密にならないために時間帯をずらして行う、など
■室内の換気について配慮工夫がされている
＊窓を開けるなどして換気をよくする
＊家庭科室や理科室などの水栓がある教室の使用なども考える、など
■学齢について配慮がされている
＊低学年の児童を優先的にうがいさせる、など
■歯みがき中の注意事項について周知されている
＊歯みがき中に私語をしない
＊歯みがきは、出来る限り上下唇を結んだ状態で行うようにする
＊前歯の裏などをみがく時は、もう一方の手で覆うようにする
＊手鏡を使用する場合は、歯みがきを確認しつつ鏡で口元を覆うようにする、など
■歯みがき剤の使用について周知されている
＊うがいで飛沫が飛びにくくなるよう使用量を制限したり使用中止したりする、など
■洗口場が混まないように配慮工夫がされている
＊ゆずり合う気持ちを指導する
＊ソーシャルディスタンスを保ち並んで待つ、など
■歯みがき後の飛び散りにくいうがいについて周知されている
＊ブクブクうがいはできる限り少ない量の水10mlくらいで行うようにする
＊水を吐き出すときは、出来る限り低い位置からゆっくり吐き出すようにする
＊一度コップに吐き出すなど工夫して行うようにする、など
■ブラッシング後の消毒について配慮工夫がされている
＊ブラッシング後は机や手鏡、洗口場を清掃消毒する、など
■歯ブラシの管理（保管）方法について考えられている
＊使用した歯ブラシは流水下でよく洗い、その後乾燥させて保管する、など

別・島・視・界

「三密」の回避、「マスク」の着用、「うがい・手洗い」の励行といった"新しい生活様式"が、感染症予防対策として、再開された各学校でも取り組まれている。いずれも感染症対策の基本的なもので、特別なことではないが、学校・学級という集団が形成されたうえで取り組むとなるとまた、別の課題があるようだ▼例えば「手洗い」。集団として取り組むうえでの指導は小学校1年の学級活動の一つ。幼・保育園との連携によって差があるが、ある学校の事前アンケートでは、食事前の手洗いはほとんど身についていたが、石鹸できちんと洗える子は4割、きれいなハンカチで手洗い後の手をふける子は半数だった。入学してすぐの学級活動で、養護教諭と担任が正しい手洗いを指導する意味がある▼知っているはずが、改めて厚労省HPの"新生活様式"を熟読すると認識不足だったものも少なくない。人は無意識に顔を触るもので、その44%は目・鼻・口の粘膜。マスクにはこれを防ぐ効果もある▼流水で15秒の手洗いでもウイルスは100分の1に。ハンドソープと流水で一定時間もみ洗いを2回セットにすると100万分の1に激減するという。

教職員のメンタルヘルス

教職員メンタルサポートネットワーク協会

第67回

連載　解決への手法と周囲の心得

今こそ自力走行できる教員を

手探りしながらの再開

可能な限りのコロナ対策を講じて学校を再開してみたものの、再開前に教員たちが想定していた以上の事態が発生するので、先生方はその都度、微調整を繰り返しながら進んでいるようです。完璧な方法がないだけに教員たちの試行錯誤が続きます。

職員会議で問題提起

例えば、熱中症対策のため、子供たちに水筒を持参させているのですが、水筒の置き場所や、飲ませるタイミング等について頭を悩ませている学校もあるようです。

ある小学校（本稿ではD小学校と呼ぶ）では、職員会議で水筒の置き場所について、まとめて一か所に置くのも感染が心配だし、窓際の涼しい場所に並べるのも外へ落ちる危険性がある等々の意見。D小学校の校長は、敢えてここでは方針を示さず、先生たちにボールを投げかけました。

最近の若手教員は事務的な能力やPCの扱いもうまい。指示されたことは着実にこなす能力も持ち合わせていますが、それ以上の想像力が働かない。これではいつまでたっても校長を乗り越えるような人材が育たない。つまり、自ら課題を見つけ、解決法を工夫し、実行に移すという「自力走行ができる」教員が育っていかない。その点に校長は不満や危機感を感じていました。

学年主任が若手リード

すると、職員会議では、机の横のフックに水筒を掛けることで解決が図られたのですが、それで納得した教員がいる一方で、1年生の学年主任（本稿では仮にK先生と呼ぶ）が若手教員を集めて語り始めました。

「水筒の肩掛け紐をそのまま机の横のフックに掛けると、紐が長すぎて水筒が床について汚れてしまいます。そこで、水筒の紐の結び方をこういうふうに2重にして掛けるように子供たちに呼びかけませんか」と実演しながら仲間の教員たちに説明をしていました。

その光景を見ていた校長は思わず笑みを浮かべました。そこには、校長に評価されることを必要以上に期待したり、叱責されることを恐れて保身に走ったりする姿はありません。

同じベクトルで前進

校長も「結果のみ」を評価するのではなく、その「プロセス」にこそ評価の重みをおくことで先生たちに安心感が拡がったのでした。このように、当分の間はコロナ対策に日々神経をすり減らしながらも、管理職と教職員が"同じベクトル"を向いている限り、着実に前へ進んで行けるのではないでしょうか。

今夏は過酷な環境下

また、ある自治体では、6月第2週目までは「分散登校」で学校再開、第3週目より平常授業で給食も開始。7月にはお弁当持ちの土曜授業を行い、8月はお盆明けより8月一杯授業を敢行するようです。教員のメンタル予防の観点から申しますと、約3か月間の長い休みの後、いきなりトップギアでスタートすると、早い人で最初の2週間で不適応を起こす教員が発生します。しかも、教育課程の完全実施に「前のめり」になる余り、7月に土曜授業（お弁当持ち）を含めた週6日の授業を強行し、とどめは8月の酷暑の中、マスクをして、冷房かけて、窓を開けるという過酷な環境下での授業です。

不適応起こす教員に注意

それでも先生方は頑張ってしまいます。しかし年配の教員や基礎疾患を抱えた人の中には、我々の想像以上に厳しい毎日を送っている方もいらっしゃいます。管理職は、例年以上に健康経営にご尽力頂き、子供も教職員も今年の夏を無事に乗り切れますように祈念致しております。

筆者＝土井一博（どい・かずひろ）順天堂大学国際教養学部教職課程客員教授、教職員メンタルサポートネットワーク協会代表、埼玉県川口市教育委員会教職員メンタルヘルスチーフカウンセラー

「修旅の手引き」JATAが作成

（一社）日本旅行業協会（JATA）は6月3日、新型コロナウイルスに対応した旅行関連業に向けた「国内修学旅行の手引き」（第1版）を作成。「新しい生活様式」を交通機関、宿泊先、体験施設等関連業界に求め、感染防止策をまとめたもの。

■学校栄養士大会中止

第61回全国栄養教諭・学校栄養職員研究大会（栃木県大会）の大会実行委員会は先頃、7月30・31日に開催予定だった大会を、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止した。大会は紙面開催とし大会冊子を発行すると決定した。

道徳教育はこうすれば〈もっと〉おもしろい
―未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション―
荒木寿友・藤澤　文 編著
A5判・288頁・本体2600円＋税
教育学・哲学，心理学，教育実践学の立場から教室場面では何が実践できるかについて詳説。道徳教育のさらなる発展を目指す。

情報時代の学校をデザインする
―学習者中心の教育に変える6つのアイデア―
C.M.ライゲルース・J.R.カノップ 著
稲垣　忠・中嶌康二・野田啓子・細井洋実・林　向達 共訳
A5判・192頁・本体2200円＋税
教育現場での取組の中から教育のパラダイム転換を起こす原則や方法を紡ぎ出し，変化への反発や混乱，葛藤を乗り越える術を提案。

北大路書房
〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8
TEL 075-431-0361 FAX 075-431-9393
http://www.kitaohji.com

「教育家庭新聞」購読申し込み書

「教育家庭新聞」は毎月第3週に発行します。郵送でお届けします。電話・FAX、またはHPからもお申し込みいただけます。
購読者には、新聞紙に加えて、読者専用Webページにアクセスできるidとパスワードをお届けします。
1. 電話 03・3864・8241（弊社販売部）　2. FAX 03・3864・8245
3. ホームページアドレス https://www.kknews.co.jp/　（1部 480円）

お申し込み書（年間10回4800円）5・12月号が休刊です

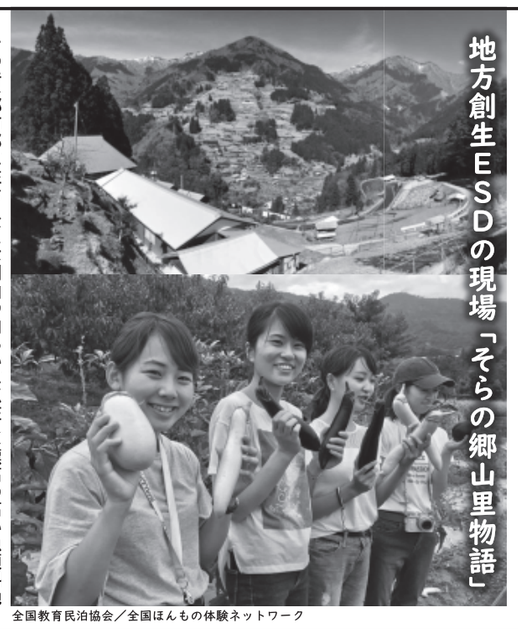
お名前		
ご職業		
ご住所	〔自宅・通勤先〕（どちらかに○を）　（〒　－　）	
連絡先	電話　（　）	お支払方法
	FAX　（　）	ご連絡を頂き次第、郵便振替及び銀行振込の用紙をお送りします。どちらかでお支払いください。

そらの郷山里物語　PBLプログラム（課題解決型学習）
Project-Based Learning

未来社会「Society 5.0」で、AI・IoT・ロボットなどの革新技術を制御し、人らしく、グローバルに活躍できる人材を育成します。

国内初ESDの実践現場と言われる理由は、世界初となる独自の実践体験型『PBL（課題解決型学習）プログラムを開発し、本物の暮らしの中でプロジェクトを展開させるところにあります。事前学習・テーマ策定、民泊、フィールドワーク・WS、パネルディスカッション、事後学習。「正解の無い問いに挑戦する力」と「サスティナブルマインド」を醸成します。

その昔、都市部に住む人々は、剣山の山あいに点在し、標高の高い急傾斜地暮らしを営む我々の集落を「そら」と呼びました。世界農業遺産に認定された現代、「そらの郷」は、いつしか当地の愛称となっています。夜空には、民家ボタルが星空と一体となり、雨の日も風の日も、力強く輝いています。



全国教育民泊協会／全国ほんもの体験ネットワーク

四国・徳島
～持続可能な開発のための教育現場～
Education sites for Sustainable Development
ESD体験型教育旅行
そらの郷山里物語
国内初!! ESDの実践現場
ほんもの田舎体験
私たちは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。
世界農業遺産の暮らし継承　ESD体験型教育旅行
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
お問い合わせ：一般社団法人そらの郷　松浦・小川　☎0883-76-0713
（一社）そらの郷／にし阿波～剣山・吉野川観光圏　『徳島県・美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町』